



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『CROWN English Expression I』の 編集にあたって

電気通信大学 松原好次

はじめに

『クラウン英語表現 I』(Crown English Expression I)の編集作業が終盤にさしかかったころ、3・11の大震災が日本を襲いました。その直後から様々な職業の人々が被災地に足を運び、救援にあたりました。その報道に接するたび、「英語の教員として一体、何ができるのだろうか」と悶々としていました。そのようなとき、たまたまツイッター上で朝鮮人・中国人に対するデマを目にしたのです。「ドロボー、放火、性犯罪に注意せよ」というものでした。私は考え込んでしまいました。“これでは関東大震災直後に広まった流言飛語と同じではないか。15円50銭の発音を強いられ語頭の濁音がうまく出せなかったため、朝鮮人をはじめとした言語的・文化的マイノリティが暴力の対象になった100年前と変わりが無いではないか…”

一方、阪神・淡路大震災や新潟中越沖地震をきっかけに、災害弱者に対するスムーズな情報提供を心がけてきた自治体やNGOが、今回の震災発生時、すみやかな対応をしました。大震災から3か月ほど経過後、私のなかで一つの考えが固まってきました。「異言語・異文化に対して開かれた心を学習者が持てるよう、平時において地道に、しかも明示的に指導していくことが私たち外国語教育に携わる者の務めだ」という考えです。この考えが編集作業の後半段階で、私の頭のなかを駆けめぐっていました。

編集の基本方針

新学習指導要領・英語表現 I の目標に即して以下の2点を編集の基本方針としました。

(1) 生徒たちの“内向き志向”を切り崩すため、世界各地に住む人々の生活や文化を可能な限り紹介する。

冒頭で述べたとおり、学習者が極限状態で異言語や異文化に対する拒絶反応を示すことがないように、平時において、他の国・地域に暮らす人々に関心を抱き、異質な事物を正しく理解できるよう導くことが大切だと考えます。そのためにも、自国の事物を正確に理解できるよう導く必要があります。日本の地理・歴史、文化、産業・技術を本課のタイトルとしたゆえんです。さらに、最初のレッスンを「世界にはばたく日本人」と題したのは、生徒たちが身近なことから出発して外の世界に目を向けるようになることを願っているからです。グローバル化した世界のなかで、自他の文化を双方向的に理解しようとして初めて、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」意欲が湧き出てくるものと考えます。英語教育の目標を「グローバル・シティズンシップの養成」に置く考えがありますが、『クラウン英語表現 I』編集の基本方針もそこにあると言えます。

(2) “背骨の通った英語”を身につけさせるため、
文法を真正面から取りあげる。

本課レッスン1の直前に、中学校から高校への橋渡しともいえるべきG-moduleを配しました。そのねらいは、「英語の構造を正確に把握したうえで表現活動に移ることが大切である」という視点を明示するためです。母語(ENL)あるいは第二言語(ESL)としてではなく、外国語(EFL)として英語を学ぶ以上、言語の仕組みを意識的に把握する必要があるからです。長い海外勤務歴をもつ私の同僚や友人は、「外国語学習のある段階で、“きちんとした英語”を身につけておかななくてははいけない」と声を合わせて言います。「事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら情報や考えを伝える」ためには、高校段階で英語の文法を体系的に習得しておかななくてはならないというわ

けです。Crown English Expression I は、文型・時制から仮定法まで文法の基礎的事項をほぼ網羅するように編集してあります。続編の Crown English Expression II を応用編として位置づける方針です。

題材選択の基準

以下の2点を基準として題材を選択しました。

(1) 編集方針 (1) に則って、可能な限り世界各地の文化・風俗習慣・言語・科学技術・自然・地理・歴史等に題材を求めると同時に、日本の事物についても英語で表現する際に必要となるであろう題材を選ぶ。

本課で取りあげた世界各国関連の題材としては、「ブータンの高校生」、「オランダの画家・フェルメール」、「リオのカーニバル」、「北アフリカのタジン料理」です。Speakingの課には、世界遺産としてアブシンベル、黄龍、マチュピチュ、サグラダ・ファミリアを選びました。また、解説や設問の部分にも、世界各地に関わる例文を取りあげました。たとえば異文化理解の視点から、イスラム文化圏のラマダンに触れるとともに、トムヤムクン、ブルコギなどを意識的に挿入しました。言語事情としては、中東・北アフリカのアラビア語、ロスアンゼルススペイン語、ケニアのスワヒリ語、エスペラント、ポルトガル語などの言語名に言及しました。科学技術の側面からはホーキングやアインシュタインなどの人名を載せてあります。美術・建築関係では、ガウディ、ル・コルビュジエを取りあげました。自然・地理・歴史としては、ナイアガラの滝、自由の女神像、天安門広場、アンコールワットなどを例文のなかに入れてあります。

一方、日本については、知床の語源としてのアイヌ語、漫画の神様・手塚治虫、リニア中央新幹線、地雷除去ロボットなどを本課の題材として選択しました。Speakingの課(Cool Japan)には、回転ずし、100円ショップ、洗浄機付きトイレなどが出てきます。言語事情の観点から、言語的マイノリティとしての日系ブラジル人も意識的に例文のなかで配してあります。また、祇園祭や能などの伝統文化に関わる語句とともに、食文化(牛丼・即席めん)や科学技術関係(ロボコン・LED・太陽電池・電気自動車・電子書籍)の語句も取りあげています。

(2) 編集方針 (2) に則った文法学習は、ややもすると味気ないものになりがちなので、好奇心を出発点として言語の学習に取り組めるよう、「生徒が飛びつきたくなるトピックであり、しかも芯のある題材」を選ぶ。

克己心をもって前進しようとするスポーツ選手として、車椅子テニスの国枝慎吾とフィギュアスケートの浅田真央を取りあげました。エクストリーム・アイロニング、カバディなどの珍しいスポーツも紹介してあります。環境保護の観点から、北極のシロクマ、瀬戸内海のカブトガニ、小笠原諸島のウミガメ、沖縄のジュゴンを題材として選びました。宇宙関係では本課レッスン1の若田光一をはじめとして、小惑星探査機・はやぶさなどを取りあげました。その他にも、ロゼッタストーン、MSF(国境なき医師団)、『沈黙の春』などを本課あるいはSpeakingの題材として選び、写真とともに紹介してあります。さらに例文として、絶滅危惧種としてのメダカ、町工場、『1Q84』など、生徒の興味をかきたて、しかも考えさせる語句に言及しました。

構成の基準

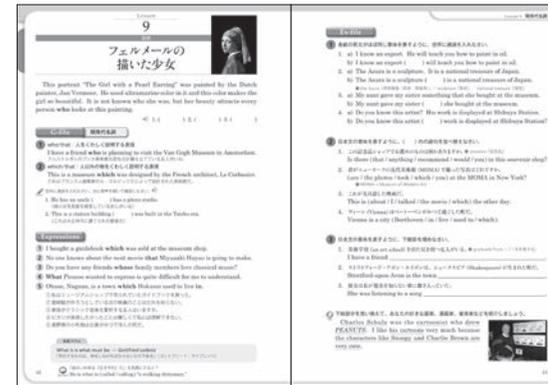
英語による表現活動に至るまでのプロセスを重視して、以下2点を教科書構成の規準としました。

(1) 本課16レッスン、Speaking 8レッスン、Grammar Profile 8編(解説編4・問題編4)の3部構成とする。

- a. 「文法は表現にとっての地下水脈である」という視点から、本課全体にわたって、主要な文法事項の基本部分を分かりやすい例文とともに提示しました。特筆すべきは、例文や練習問題が文法面だけでなくテーマ面でも統一されていることです。
- b. Speakingの8レッスンでは「発表に必要な表現」(「聴衆を引きつける」など)と「つなぎ言葉」(「時間的順序を示す」など)に焦点を当てて、スピーチやプレゼンテーションに取り組む際の基本表現を提示するとともに、使用場面・発表内容に合わせた到達目標を具体的に明示しています。
- c. Grammar Profileの解説編には、英語で表現する際に役立つ「日本語と英語の発想のちがいを」取りあげた後、確認のための問題を付してあります。問題編は、直前の4レッスンで扱った文法項目を定着させるための復習として用意しました。

(2) 編集方針 (2) に則り、主要な文法事項や「発表に必要な表現」を確認して定着を図ったのち、英語による表現へ移行する。

a. 本課の流れ



見開きの左ページ最上段には、写真の人物・事物の紹介文(60~70語程度)を載せました。授業の導入がスムーズにいくように、Listening ComprehensionのT/F問題を3つ用意してあります。その下にG-file(文法項目の簡潔な説明)、CHECK(確認のための問題)、Expressions(さらなる例文)、名言コラム、One Point(日本人の英語学習者が誤りやすいポイントに焦点を当てた正誤問題)が続きます。右ページには、Ex-file(空所補充、語句整序、部分英訳の問題)の後にTry(各課の題材と文法項目を使い、自分の意見を書いたり話したりするコーナー)が続きます。このコーナーでは、写真と例文を参考に自由作文をしたり、ペアでの会話をしたりして、コミュニケーション活動のなかで様々な表現の定着を図ります。

b. Speakingの流れ

見開きの左ページ最上段に配したInputでは、各課の題材に関する情報をリスニングまたはリーディングで受信します。Inputで得た情報を、右ページ最上段のInfo Depotに空所補充形式で一時的に保管します。その情報をOutputに補充すると、Eメール・エッセイ・スピーチなどの原稿が完成し、場面・目的に応じたOutput各種の構成を確認できる仕組みになっています。最後にTryで、各課の題材に基づき、「導入」「本論・展開」「結び」といったスピーチの構成を問題形式で再確認することになります。この際、「発表に必要な表現」と「つなぎ言葉」を活用することによって、「情報や意見を論理的にまとめる力」の養成ができます。また音声面では、

Sounds(「音の連結」「強勢とリズム」「文の区切り」「感情を入れて読む」)を参考にすることができます。Tryは、生徒が無理なくスピーチに挑戦できるよう工夫してあるため、「自分の考えをまとめ、適切に伝える能力」を徐々に高めていくことができます。

c. Grammar Profileの流れ

解説編には「動作動詞と状態動詞」「自動詞と他動詞」「冠詞」「名詞の□と□の区別」「日英語の意味のズレ」「くだけた表現・ていねいな表現」「主語の選び方」などについての解説をクイズとともに載せてあります。問題編は、空所補充・語句整序・部分英訳・全体英訳の問題とColumnから成り立っています。Columnは「過去形と現在完了形」「不定詞と動名詞」「直説法と仮定法」など、英語で表現する際に間違いやすいポイントの解説コラムです。

おわりに

“Art is long, life is short.” という成句の意味を吟味する必要があると思います。「技(わざ)を修得するには長い時間がかかる。それに比べ、人生は何とはやく過ぎ去っていくものか」という意味でしょうが、基本の徹底がいかに重要であることを示しています。この成句は医療やスポーツや音楽だけでなく外国語学習にも当てはまります。基本(異言語・異文化に対する寛容心および目標言語の構造)を身につけておけば、将来、学習者一人ひとりが自分の仕事などで外国語の使用を迫られたとき、その基本を活かし、頻りに練習・使用することによってコミュニケーション能力を高めることができるはずで、外国語の修得はたやすくできるものではないこと、そして、高校においては苦しいかもしれないが基本を自分の身体に叩き込む必要があること——この2点を地道に、しかも明示的に伝えていただきたいと思います。『クラウン英語表現I』は、中学・高校の教員が中心となって編集しましたので、先生方のニーズに合致した教科書ができたのではないかと自負しております。ご一読いただけたら幸いです。

